

秘密結社

声優はVisualに出るな！会議

TCVV

<http://www.tcvv.org/>

TCVV 白書 特別号 通巻 25 号 2021 年 12 月 30 日発行（不定期発行）ISSN 2185-9043

TCVV 白書

特別号

特別記事： TCVV 議長、ナナブンノニジュウニを大いに語る。

The TCVV Whitepaper 2 0 2 1 SP2



声優は Visual に出るな！宣言 Ver1.11

声優は Visual に出るな会議 決議第 00000 号

声優は映画俳優・舞台俳優に比べ声だけで勝負をするという過酷な生業である。
映画・舞台俳優は身振り手振りが付加されるので視覚に訴えることが効く。
が、声優はそうは行かない。だからこそ高度な演技力が必要とされるのではないだろうか。
現在、第四次声優ブームと言われているそうだが、何か違和感を感じずにはいられない。
最近の「声優」と呼ばれる人々は Visual、その他のメディアに頼りすぎ・出過ぎではないだろうか？
今やマーケティングでメディアを十分に活用すれば、そこら辺のお姉ちゃんですえも CD をあつという間に売ってしまう。この状況を「沈黙のミリオンセラー」*1とは良く言ったものである。
「声優」自体が今やメディア戦略によって商品になってしまったと思う。
この戦略は聴衆を気がつかない間に購買者に変えてしまう巧みなシステムだと考える。
しかし、このシステムは本来の価値。つまり「声のプロフェッショナル」としての声優を正当に評価していないものであると言える。

舞台俳優の中には決して Visual に耐えられる人ばかりではない。
が、そのような人が舞台に立てるのは、人を引き付ける演技力を持っているためであると考え。
一方、声優の質は低下している。これは最近のアニメーションは高度な演技力を必要としないものが多くなっているからといえよう。そうなれば声優の質が低下するのは至極当然のことである。*2
従って、高度な演技を必要とする作品では声優の能力の限界が露呈してしまう。
例えば、劇場版新世紀エヴァンゲリオン最後の最後はアスカのほんの一言で終わる。*3
しかし、この台詞は始めに用意してあったものとは違うものであったようだ。
本来は「あんたばか？」であったようだった。が、声優の力量不足のため、結局「気持ち悪い。」へと変更を余儀なくされた。
完全に声優が役に負けてしまっていたのである。
結果、作品は中途半端に仕上がってしまい損害を被ったのは我々聴衆者である。

声優が新境地を求めるのもいい。しかし、声優も役者であるのだからまず足場を固めてから進出するのが筋と考える。
我々は、健全な日本アニメ・マンガの質を守るため、ここに「声優は Visual に出るな！」を宣言する。

*1 誰もが知っている訳でもないのに 100 万枚以上売ったレコード・CD のこと。一昔前は 100 万枚といたら大部分の人がその曲を知っていた。

*2 劇場版 Evangelion のパンフレット（春、夏ともに）にて清川元夢氏はプロ意識なき声優への批判とも解釈できる発言をしている。これは非常に勇気ある発言と言える。（普通はこういう事は映画のパンフでは言わないであろう。）

*3 実は Evangelion はヲタク（庵野氏）によるヲタク批判であったことはあまり報じられていない。ヲタクの皆様はそのメッセージを受け取れなかったとのこと。（レイとシンジが列車に乗っていて会話をするあのシーンが批判部分とされている）

目次

巻頭言	4
1 TCVV 議長、ナナブンノニジュウニを大いに語る。	5
2 声優システム論 15-アイドル化声優を考える-	11
3 Chairman's free talk -議長放談-	13
編集後記	14

ナナブンノニジュウニは 2.5 次元たるか

声優がアイドル化して久しい。

そのアイドル声優と相性が良いアイドル・アニメが今や隆盛を究めている。また昨今は 3D モデリング技術やそれを動かすモーション技術に応用した Vtuber も成熟の域に達している。我々が活動を始めた二十数年前では考えられないことである。

3 次元の存在たるアイドルや声優、2 次元の存在たるキャラクタ。そして昨今、その中間を 2.5 次元として新しいコンテンツも芽生え始めている。

そんな中、AKB シリーズの仕掛け人である秋元康は「デジタル声優アイドル」というコンセプトを引っ提げて「ナナブンノニジュウニ」をプロデュースした。

ナナブンノニジュウニは、アイドル、声優、現代テクノロジーを源泉として既存のアイドル声優路線から違う角度で攻めてきた。我々はこれを脅威として捉え大いに警戒をした。このデジタル声優アイドルなるナナブンノニジュウニという存在について、我々は総力を挙げて調査研究してきた。そして、様々なものが見えて来た。今回本誌は特別号として TCVV がこれまで研究してきた成果の一部を発表したいと思う。

現段階ではナナブンノニジュウニは 2.5 次元たる存在ではないと考えている。活動的に言えば限りなく 3 次元側に寄っていると言わざるを得ない。2 次元に寄せようと努力しているが既存のアイドル路線から抜け出せていない。その影響もあって本来の目的であったテレビアニメについては成功というには程遠いものだったと言わざるを得ない

そもそもグループの目的や方向性が見えないのである。試行錯誤しながら模索している感はあるが 2.5 次元たらんとするのか 3 次元たらんとするのかハッキリせずブレまくっている。

巻頭言にて結論めいたことを話してしまったが、詳しくは本文をご覧いただきたいと思う。

二十数年の間に声優をとりまく環境は激変した。

平成の世が終わり令和の御代に我々は「声優とは何か?」という基本的なことを再度考える必要があると思う。今後、デジタル声優アイドルという新しい概念が定着するかどうかは彼女らの活動次第ではないかと思う。

1 TCVV 議長、ナナブンノニジュウニを大いに語る。

TCVV 議長

1.1 はじめに

本サークル「声優は Visual に出るな会議」(以下、TCVV)をご存知の方には今さら説明する必要はないと思うが、ご存知でない方に我々のサークルを簡単に説明する。

我々は演技力の無い声優に物申すサークルである。1997 年より活動をしており特にアイドル化している声優に対して苦言を呈してきた自他ともに認める**厄介サークル**である。

我々は作品が主で役者は従という考えから下手な演技で作品が壊されるのを一番に悲しむ。

今や作品より声優が注目され「豪華声優陣」などと触れ込みもあり役者が主になってしまっているくらいすらある。

このようなこともあり秋元康がナナニジプロジェクトを発表した際にはかなり警戒した。あの悪夢のようなテレビアニメ AKB0048 では飽きたらずリアル声優にまで手を伸ばしてきたのかと思ったのだ。

1.2 ナナブンノニジュウニとは

ナナブンノニジュウニ(以下、ナナニジ)は AKB シリーズを仕掛けた秋元康がソニーミュージックとアニプレックスと合同でプロデュースしている**デジタル声優アイドル**である。2016 年 12 月 24 日、*4 1 万 325 人の中からオーディションで選ばれたアイドルグループである。グループ名は「無限に続く可能性」から割り切れない円周率の近似値である 22/7 から来ている。

メンバーは、リーダーの帆風千春(卒業済)、センターの西條和、以下、天城サリー、河瀬詩、白沢かなえ、涼花萌、武田愛奈(12 月卒業予定)、宮瀬玲奈、花川芽衣(卒業済)、海乃るり(卒業済)、倉岡水把(卒業済)、高辻麗(契約解除)である。

当初、11 人であったが紆余曲折あって現在は 7 名である。

デジタル声優アイドルの定義は曖昧だが概念的には二次元(キャラクタ)と三次元の間に存在するアイドルと言ったところであるようだ。筆者自身も未だによく分かっていない。

このことがこのグループを分かりにくくしていると考ええる。

1.3 ナナニジ研究はじめたきっかけ

そんな感じで当初、敵意剥き出しの構えで観測してきたが 2018 年 7 月から放送がはじまったナナニジの冠番組である「22/7 計算中」というモーションキャプチャを使用したちょっと変わったバラエティ番組を見始めてから心情が変化した。

番組自体はメンバーがモーションキャプチャにより 2 次元キャラクタを動かし声を当てているものである。最初のウチはさほど興味はなく BGM 代わりに見ていた。それが変わったのが、メンバー(中の人)とキャラクタ

*4 そのため毎年 12 月 24 日は誕生記念日となっている

が殆ど同じ性格であると分かってから。それからは俄然興味が湧いた。通常、声優とキャラは分離して考えるのが一般的である。キャラクタと声優を同一視してガッカリした例も枚挙に暇が無いがナナニジはほぼ同一であったのが衝撃だった。ようやくデジタル声優アイドルの片鱗が見えた。

従来の路線とは明らかに違う。さらに本格的に研究するため行けるライブにはなるべく足を運こび、行けない時はオンラインで試聴した。毎週欠かさず「22/7 計算中」を試聴し、文化放送で毎週土曜日放送の「割り切れないラジオ」も欠かさず視聴した。さらに深く研究したくてファンクラブにも入った。ここまで来たら完全にファンだろという位にまでになり、ミイラ取りがミイラになったとか言われる始末だった。一ファンになった位の気概で研究しないと本質が見えて来ないのではないかと思ったからだ。

1.4 当初からイレギュラーだらけ問題だらけ

そんなナナニジはあるが当初から異例続きのグループだった。

まず、補欠組の選出。当初、合格枠は8人だったが急遽補欠枠で3人追加された。今考えれば、これは迷走の序曲だったのかも知れない。

次に不自然なセンター指名。通常、センターと言えば花形でありグループの中で一番優秀な人間が選ばれるものである。実際、AKB シリーズではセンターは醜惡な総選挙制度によって選出される。しかし、ナナニジの場合は一番、無口で積極性に欠ける西條が不自然なまでにセンターに抜擢されている。確かに彼女のダンスはとても巧く非常にキレキレでありパフォーパンス中の笑顔はホントにかわいいと思った。^{*5}テレビアニメへの布石だったのかも知れないが通常考え方ではない。まさに異例である。

そして体調不良者の続出。結成して2年あまり、ようやくアニメ放送が翌年1月に決定した2019年9月、メンバーの一人である齋藤ニコル役の花川が体調不良による休養宣言をした。この時点では、その後に衝撃の事態になるとはファンは誰も予想していなかったかと思う。

アニメ放送直前の12月、花川は体調回復しない理由で異例の卒業となった。急遽、齋藤ニコル役の補充として河瀬詩が新メンバーに加入するという異例な展開をした。この発表は毎年恒例のバースデーライブにて正式発表となった。筆者も現地に赴きライブに参加していたが、この時の衝撃と言ったら筆舌に尽くし難い。アニメ史に残る暴挙と言っても過言ではない。花川はもう、この業界にもどってこないのだろうと個人的には思っていたし、おそらく、大半のファンもこの時には、そう予想したに違いない。

1年後にまさかの展開が待っているなんてファンの誰も予想していなかっただろう...

そしてアニメ放送中の2020年2月上旬、高辻が体調不良で休養してしまう。さらにさらに2月下旬、今度は倉岡が持病の悪化で休養宣言をした。レギュラーラジオ番組「くらてん」も途中で降板した形になってしまい、相方の天城が一人でMCを行い3ヶ月後に終了した。

ここまで来ると解散も噂されるようになってきた。本命のテレビアニメも放送されたことだし...

2020年9月、久々に全員そろってのライブにて一安心したのも束の間、12月1日に今度は武田が学業専念のため突然の休業宣言をした。^{*6}

さらに12月下旬、リーダーの帆風が2021年2月をもって卒業との発表となった。リーダーが卒業というこれまた衝撃が走った。

そんなこともあって全員揃ってのライブは数えるほどしかない。

恐いことにイレギュラーはここで収束しない。2021年9月、新メンバー募集のアナウンスと倉岡、海乃、武

^{*5} 仕事はきっかりするんだなと思った。それなら、もう少し演技をと思うのは当方だけではないはず。

^{*6} 栄養系学校への入学準備だったらいい。

田が卒業するとの発表があった。

これだけでも十分衝撃だったのにさらなる衝撃が襲った。

久々の有観客ライブが本年 11 月 14 日に迫った 11 月 1 日に高辻が電撃解雇という公式からの爆弾発表で衝撃が走った。卒業ではなく解雇である。

これで約半分のメンバーがいなくなってしまったことになる。地下アイドルであれば完全に解散状態である。

ナナニジは 1 万数百余名の中からアニメなどの 2 次元に特化し、メンバーも 8 人 (最終的には 11 人になったが) のみの少数精鋭である。AKB シリーズや坂道シリーズよりもエリート集団でどこよりも恵まれた環境だったはず。

ここまでガタガタになったのは運営側のやり方のまずさではないかと思う。

1.5 閉鎖性

ナナニジを語る上での特徴として閉鎖性を挙げたい。閉鎖性と言ってもこの場合、秘密主義ということではなく活動の範囲と言ったほうが良い。その閉鎖性を象徴するのが自己紹介をする際に必ず「〇〇役の〇〇です」と自分の演じているキャラクター名を名乗ることである。ナナニジは声優という側面を持っていつつも活動範囲は自分が演じているキャラクタを越えた範囲で活動することが極めて少ない。稀に一部のメンバーが舞台に出ることがあるが多くの場合においては他の作品に出ることは無い。

他の作品へ出ることは無く、淡々とアイドルグループとして活動してきた。通常ありがちな他のアニメ作品の OP や ED も自分たちの出演したテレビアニメ「22/7」以外では歌うことは全く無く、その閉鎖主義を貫いている。

これらを踏まえて考えるとアニメ作品である「22/7」自体がグループの PV なのではと思ったら、しっくり来た。

1.6 声優としての実績

閉鎖性が強いナナニジではあるが初期においては他作品にちょい役で声優として出演している者もいた。ただし作品の多くはアニプレックス作品である。キングレコードが「おかかえ声優」を自身が出資しているアニメに出させるのと同じ手法である。(これはちょっと頂けない)

他作品への出演数は天城が断トツである。演技の巧さ以外にも米国から来たことで英語、スペイン語が堪能でフランス語も多少話せるという面を買われてのことが大きいと思われる。

なお本人名義での声優実績は天城以外は、ほぼ皆無である。

閉鎖性により他の作品への侵害は最低限に抑えられ TCVV にとって幸いであった。しかしメンバーの中の声優志望者にとっては声優として他の作品に出ることが出来ず不幸だったのかも知れない。これが大量卒業への遠因だったと考えている。

またナナニジはテレビアニメ開始前から VTuber としても活動して頻繁に動画を更新していた。しかし、人気は今一つで微妙だった。認知度はナナニジファンのみで一般には全く話題に登らず再生数は伸び悩んだ。本来であればナナニジは VTuber の概念と抜群に相性が良いものであったはず。にもかからわず、結果は奮わなかった。既にこの時点で**お察し案件**だったのかも知れない。

1.7 扱いが雑な補欠組と高辻問題

当初 8 人選出のところ追加で 3 人が選出されたが、3 人について正式にキャラクターが当てられたのは結成後、1 年以上も経過してから。その間は生殺し状態だった。これでは先行きが不安になるだろう。しかも、肝心なアニメでの出演は本編ではなく BD/DVD での特典映像の番外編としての登場。主要 8 人には各自のシナリオがあったのに、補欠 3 人については、まとめたシナリオだった。この扱いの低さでモチベーションが維持できたのが不思議なくらいである。

そんな中で本年 11 月 1 日、補欠組の一人である高辻を素行不良とのことで電撃解雇した。しかも、公式からは悪意ある発表としか思えない内容だった。高辻と言えば、グループ内ユニットの紅白対抗のプロデュースや SHOWROOM での積極的な配信などナナニジの功労者であるといえるのにだ。前述したように高辻は約 1 年前に体調不良で休んでいた。一時期は花川のようにグループへの復帰がないのかと危ぶまれていた。が、その後に見事に復帰した。しかし、無理が祟ったようで無断欠席など続いたようだ。ただ、これに関しては運営のフォローが十分に出来ていたのか甚だ疑問である。皮肉にもグループ名通り割り切れない思いである。

1.8 棒問題

一番のテーマであったテレビアニメ「22/7」に関して言えば、棒読みだのシナリオが変だの散々な言われようだった。

特に滝川みう (CV: 西條和)、斉藤ニコル (CV 河瀬詩) の会話シーンは棒読み頂上決戦と揶揄された。

棒読みは TCVV が最も嫌悪する害悪である。棒読みだとそれ気になってシナリオが頭に入ってこないという問題があるからだ。これは作品の破壊であり脅威である。直近ではナナマルサンバツがのヒロイン役が記憶に新しい。

しかし、アニメ「22/7」では、大きい問題にはならなかった。何故か？いくつか理由があるが、一つ目であるが確かにアニメ「22/7」は衝撃的な棒読みであったものの、始終しゃべっている訳ではないのでシナリオが頭に入ってこないという弊害が最小限に抑えられた。(それでも西條、河瀬の出る回は苦痛だったが)

二つ目であるがアニメ「22/7」は PV としての側面が強かった。オリジナルであり他の作品を侵害していない上に PV に本人達が出るのは当たり前な上、声優だということを殊更強調もしていないので過大な期待をしていなくどこか無意識に納得してしまったのではないかと考える。

一方でナナマルサンバツはどうか。問題なのは本業の声優ではないアイドルが原作付き作品に侵攻してきたことだ。

しかもメインヒロインでの抜擢であるのでセリフが多いため下手な演技が絶えず耳に入ってくるのでシナリオが頭に入ってくる。原作を楽しみにしていた人間にとってみれば苦痛以外に何者でもなかったはず。

この点が違うと考える。だからと言ってナナニジの棒読みを是認するつもりは毛頭ない。

今、考えればアニメは延期すべきだったのではないと思う。放送直前の花川の卒業により急遽抜擢された河瀬は全くボイストレーニングをしていなかったという。その意味では酷だった。2 クール延期できれば、*7 だいぶ改善されたのではないと思うだけに大変残念だ。

*7 劇中の初ライブシーンの放送日はリアルで開催予定だった初ツアーライブ（後に有観客での開催は中止）と同じ週だった。2 次元と 3 次元をシンクロさせたかったので放送延期は出来なかったのだろう。もし、コロナがもっと早く流行していれば早期に延期の判断は出来たのかも知れない。

1.9 ナナニジの方向性と限界

ナナニジはデジタル声優アイドルという触れ込みで始められた。声優ファンもアイドルファンもアニメファンも取り込むことで「いいとこ取り」をしようとしたのだろう。しかし、これが仇になっていると考える。何もかもが中途半端になって方向性が見えないのだ。

アイドルなのか声優なのか。そもそもデジタル声優アイドルの定義とは。従来のアイドル声優との差別化など、方向性が見えないのである。稀に舞台に出ることがあるがデジタル声優を標榜するのであれば舞台への出演は趣旨がブレているのではないかと感じる。この点も方向性が見えない原因と言えよう。

さらに閉鎖性により特定のキャラに縛られつづけることで特定のキャラ枠から出ることができない。

これらが**ナナニジの限界**であると結論する。曖昧な方向性と閉鎖性がメンバーの大量卒業の原因と考えている。

ナナニジのメンバーは声優志望とアイドル志望に分れていたらしい。声優として残れるのは3人程度だろうと予想していたが実力ありそうな人間がこぞって去ってしまった。補欠メンバーの一人である武田はキャラになりきって巧く演じていた。しかし、グループの未来と自分の将来を天秤にかけて、全く違う道を進むことにしたのである。

意外だったのは海乃の卒業である。海乃が声優志望だったとは知らなかった。彼女推しであれば知っていたのかも知れないが筆者は今回の卒業で初めて声優志望だったと知った。彼女は以前、SMA(ソニー・ミュージック・アーツ)に所属しており、別名義でアイドル活動をしていた。そのためアイドル志望だと思っていた。SMA時代、同時期に先輩として水無いのり、伊波杏樹がいた。彼女らの活躍を見るとナナニジにいても声優としてのキャリアは積めないと判断し、軌道修正を図ったのかも知れない。なお海乃は12月24日に吉宮瑠織(よしみやるり)と名前を変えて再デビューした。(声優事務所かどうか不明)

アニメ放送直前で卒業した花川に至ってはこの業界に見切りをつけたのかと思っていたが本年1月に浅倉唯と名前を変えて再デビューした。これにはホントに驚いた。しかも、公式ページには一部前歴が掲げられていた。そして仮面ライダーでのレギュラー抜擢。女優として写真集やら雑誌グラビアにも出た。これは誰もが予想していなかっただろう。芸能界への熱は冷めてなかったんだらうと思う。恐らくはナナニジの限界を察して早々に離脱を判断したのであろう。

コロナ禍の影響はナナニジにとって不幸だったと思う。本来であればアニメ放送でエンジンがかかるころ尽く予定が狂ってしまった。確かに時期が悪かったと思う。ただコロナ禍は他の職業声優やアイドルにも影響を与えているので声優という視点から見ればコロナはナナニジにとっては本質的なところには影響していなかったかと思う。

1.10 ナナニジの声優としての脅威性

これまで見てきたようにナナニジは「声優でござい」という主張が基本的に少ない。

というより声優らしい活動は殆どしていない。TCVVとしても声優として見ていない。そもそも、聴衆を魅了させるほどの演技や声があるかと言えば否定せざるを得ない。職業声優やそれを目指している人達に遠く及ばないと思う。

ナナニジは「デジタル声優アイドル」。あくまでもアイドルであり声優として認識されていない。その左証に「22/7」はアニメファンからは大不評だったにもかかわらずライブは大盛況である。ナナニジは声優やアニメ

に重きを置いていないアイドルファンに支えられていると考える。

TCVV は当初、ナナニジを脅威の対象としていたが、これまでの観察から脅威ではないと判断した。秋元は大嫌いだけど現状のナナニジに嫌悪感があまりないのは他のアニメ作品をほとんど侵略して来なかったからだと思う。棒読みは確かに害悪だが閉鎖環境から出て来なければそれでいい。ナナニジは数々の問題があったけど閉鎖性によりアニメ業界が大ダメージを受けることは殆どなかった。TCVV にとっては好ましい閉鎖性が皮肉なことに、この閉鎖性が声優志望メンバーの卒業への契機となったと考える。

ナナニジは初期メンバーの 5 人の卒業を持って第一章は終了とのこと。そして、新メンバー加入で第二章とのことであるが声優志望組が抜けたことから、この先は純粋にアイドル活動が中心になりそうである。そうするとアニメ作品への侵攻の可能性は減り、ますます従来のアイドルとの差別化が難しくなると思う。

1.11 さいごに

ナナニジはパラダイムシフトを起こせるのではないかと思っていたが現時点では大きなパラダイムシフトは起こせていない。

ナナニジの特徴である閉鎖性は TCVV にとっては幸いであったがナナニジメンバーの声優志望者にとっては不幸だったのかも知れない。

それならば今後は閉鎖環境だからできる試みをしてほしいとも思う。例えばアニメの劇中にて映画吹き替えの出演をするが、大変な棒読みで批判を浴びる話はどうだろうか。とても「メタ」なシナリオで演出としては大変面白いし、考えさせられるテーマだと思う。是非やってもらいたいと思う。

前述したように第二章も進む方向は、よりアイドル路線ではないかと考える。もし、声優路線を強調して行くのであれば声優志望組が去ることがなかっただろうから今より更にアイドル方向に向くだろうと予測している。それを考えれば他の作品への侵害の恐れは極めて低いと考える。もし他のアニメ作品へ出るようなことであれば、それこそ運営はクソであるし、卒業した声優志望メンバーらは浮べれない。そして何よりも我々が全力で叩くだろう。それを考えても今のままの閉鎖空間での活動が最適と考える。閉鎖環境から出て来なければそれでいい。

ただ一抹の不安としてはアニプレックス作品限定で出演するかも知れないという点だけは拭いきれていない。現状の閉鎖路線を継承してゆくのであれば、個人的もこれからも応援して行きたいと思う次第だ。

ナナニジは未だに大きなパラダイムシフトを起してはいないものの一つの可能性、すなわち**他の作品を侵さない無害な声優化アイドルの可能性**を提示したと思う。

そして看板である「デジタル声優アイドル」とは何かをハッキリと示してもらいたい。それを確認するためにも筆者は引き続き活動には注視して行くつもりである。

2 声優システム論 15-アイドル化声優を考える-

TCVV 議長

声優システム論とは

現代声優はアニメや洋画に声を当てるだけの存在ではなく社会や経済にも影響を与える存在になり、その動きは一昔前の古典的な声優観では説明出来無い。

そこで現代声優の振舞いを複雑系として捉えることを考え、この系を『声優システム』と名付けた。^{*8}

本論は『声優システム』を様々な角度から考察するものである。

1. アイドル声優とは？

前回、アイドルの声優化について考えた。今回は特別編なので原点に立ち返って声優のアイドル化についてあらためて述べたい。

以前、本論にて声優アイドルとアイドル声優の違いは軸足をどこに置いているかの違いだと述べた。

アイドルに軸足を置いて声優ぽいことをするのが声優（化）アイドルだと定義した。そして、その逆がアイドル（化）声優だと述べた。

声優が影の存在から陽向の存在になってからアイドル化するようになった。それに呼応するように志願者も増えた。

2. 声優志望者多すぎ問題

TCVV を設立した当初は演技が下手なのに露出は一人前という者が多くいた。そんな声優に精進を促す目的で TCVV を立ち上げた。二十数年経ち過当とも言える競争により下手な人間はほぼいなくなった。

良くなったと思う反面、副次的な問題が出た。声優のアイドル性前面に出すぎて声優を目指す人間が増えすぎたのだ。

我々は声優はすべからく役者だと認識しており疑いの余地は無いものだと考えている。しかし、志望者は声優が役者という認識があるのだろうか。

声優志願者は3万人とも30万人とも言われている。現代声優の華やかなところばかりが喧伝され声優志願者が増えているようだ。スマフォアプリなど需要により活躍の機会は増えているが絶対的な席は少ない。職業声優として生活できるのは300人程度と言われている。アイドル声優はエリート中のエリートなのだ。食べて行ける300人の中でも頂点に君臨する存在なのだ。

アイドル声優は、演技よし、顔よし、歌よし、そこらのアイドルより難しい。それにも関わらず声優のアイドル化は声優志願者をいたずらに増やし過当競争を煽っている感がある。しかも、アイドル声優は将来に渡って安泰かと言えばNOである。過当競争により新陳代謝が激しい業界になってしまい使い捨て状態である。

^{*8} システムたる典型的な例は声優のためにアニメが作られるようになったこと。主従で言えば、従だった声優が主になったという点から見ても『システム』要件を満たしている。

ハードな割に活動できる期間は大変短い。

元来、役者というは喰えないというのが定番である。しかし、その認識はあるのだろうか。寧ろ、これを広く宣伝すべきではないか。

声優志願者は岩田光央氏の著書である「声優道」を是非読んでもらいたいと思うが時間が無いのであれば岩田氏がプレジデントオンラインに寄せた記事^{*9}だけでも読んでいただきたいと思う。

声優のアイドル化は声優への過大な幻想の誘導という副次的な問題を発生させているのではないかと最近、思い始めた。

3. ドル売りの問題

声優をアイドルとして売り出すことをドル売りという。もう何度も同じことが繰り返されているのに一向に改善されない問題が、いわゆるドル売りされている声優の恋愛問題である。

声優は役者であるが人間でもある。恋愛もすることだろうし、それが役の糧となるだろう。基本的には問題は無いはずだがドル売りすることで声優にアイドルという属性を付けてしまう。

そもそもアイドルとは疑似恋愛の対象である。そこへ恋愛話が降って湧けば、支持していたファンが怒るのも無理はない。ファンから裏切り者扱いされるのは当然の帰結である。悪いのはアイドル属性を付けた事務所であるが、その辺のリスクを承知した上で活動していないドル売り声優もどうかと思う。

アイドル声優は声優とアイドルのダメなところが濃縮されたもの考える。双方の「いいとこどり」しようとすると失敗する。^{*10}

4. 無害なアイドル化声優は可能か？

声優(化)アイドルが出た場合、下手な演技で作品を壊すので迷惑行為だと思っていた。全ての声優(化)アイドルは作品を壊す有害なものとなしにきたがナナブンノニジュウニの登場により無害な声優(化)アイドルは可能ではないかと思えてきた。

では、無害なアイドル化声優は可能なのか。ナナニジのように閉鎖空間で活動すれば良いのだろうか。否。それでは役者として意味が無いのは明白だろう。したがってナナニジのような手法は使えない。

結論からは言えば極めて難しいと思う。アイドルというキャラクタを一分の隙を見せずに演技しきる覚悟と才能がある者でないと成り立たないと考えている。できても稀な存在になりそうである。現状では、あの人^{*11}ぐらいではないか？

5. 今回のまとめ。

- 過当競争により演技が下手なアイドル声優は殆どいなくなった。
- 声優の実体を見ずに目指す者が増えている。
- ドル売り声優の恋愛問題は解決し難い。
- 真のアイドル声優は職人芸の域である。

^{*9} <https://president.jp/articles/-/28284>

^{*10} むかし、電総研（現在の産総研）でアナログコンピュータとデジタルコンピュータの良いとこどりをしようとアナデジコンピュータを作ったが、完成したそれは双方の悪い特徴が出てしまって失敗した。

^{*11} 王国の人

3 Chairman's free talk -議長放談-

TCVV 議長

1.M.A.O と坂本真綾

MAO と坂本真綾、個人的には凄く対照的な存在と思っている。M.A.O は様々な声で色々な演技を見せる。多種多彩な演技や声が出せるので ED のテロップを見るまで誰だか分からないくらいであり「ステルス声優」とも言われ重用されるのも分かる。

一方、坂本真綾。声色が多い訳でも、特筆すべき演技があるわけでもない。さらにポリシーでキャラソンを歌わない。にもかかわらず何故、彼女が重用されるのか正直わからない。

2. 歌手デビューをアーティストデビューと言うな

何度も書いている話。声優に限らないが何で歌手デビューをアーティストデビューというのだ。作詞や作曲や振り付けを創作したのならまだしも唄うことがアーティストなのか？よしんば、そうだとしたら声優であればキャラソンを唄うことの方がそのキャラクターになりきって歌唱するので高度な技術が必要であり、よっぽどアーティストックだと思う。百歩譲って「本人名義で唄うこと」がアーティストデビューだとしてもやっぱり違和感は拭えない。

3. ダウナー系の演技は難しい

これも随分と前から指摘しているけど声が低めのダウナー系の演技というのは凄く難しいものと思っている。名の売れた声優でもダウナー系の演技だと「ん？」と思うことがある。かなり修練を重ねないと上手い演技に聞こえないと考える。なのでテレビアニメ「22/7」で滝川みう役に西條和を抜擢したのは、かなり無理があったのかと思う。

4. ナナニジ卒業と第二章

高辻麗の解雇直後にあったライブ「ANNIVERSARY LIVE 2021」では運営側は高辻の存在を完全に無かったものとして扱いたい空気があった。しかし、武田愛奈が卒業するにあたり感謝の意を述べていた際、高辻からのメッセージをキャラ名の東条悠希で紹介した。これはとても感慨深いものだった。また、倉岡水把も twitter にて卒業へ際して 12 人という数字を出していた。この数字には途中で卒業した花川芽衣も含まれており、これも感慨深いと思った。メンバーを大事にして来たのだと思った。あと、帆風千春が卒業して姉の愛美がいる響に所属したのは既定通りというか予想通りすぎて別の意味で驚いた。

これから第二幕が始まるがテレビアニメの続編があるにせよ無いにせよナナニジの限界が見えてしまっている。これで、これからどのように広げるのか。不安しかないのが正直なところ。

編集後記

本誌をご高覧頂きありがとうございます。

平成最後のコミケットから3年。令和になって初めてのサークル参加です。

久々のサークル参加ですが気付いたらサークル参加は今回で20周年を迎えました。

こんな厄介サークルですが常連の皆様におかれましては長年のご愛顧ありがとうございました。

さて今回はコロナ禍の中の開催ということで、いつも通りの内容から変更して16年振り2回目の特別号としました。サークル配置がナナニジ系サークルと声優評論系サークルのちょうど境界に配置されたという絶好なタイミングであったので内容はここ数年、追って来たナナニジ特集としました。

一ファンとしてナナニジを見たらどうなのかという視点で書いてみました。いろいろと書きたいことが沢山ありましたが言いたいことを全部書いてしまうと論旨がズレてきてしまうので書けなかったこともあります。それについては、いずれどこかで書きたいと思います。

TCVVが懸念しているのはアイドルの声優化です。当初、ナナニジにそれを懸念していました。本文でも述べましたが我々は秋元が大嫌いだし、アイドル声優も嫌いです。しかし、現状のナナニジに嫌悪感があまりないのは閉鎖空間での活動により他のアニメ作品をほとんど侵略して来なかったのが大きいと思っています。前回、編集後記にて「声優と名乗らず閉じた世界の中でやっている分には別に構わない」と述べました。今回本編中でも書きましたが閉鎖環境にいる限りは我々の思想と共存できるものと思っています。

今後も現状の閉鎖路線のままで行って欲しいと思います。ナナニジはソニーグループによる強力なサポートがあるのでビジネス的に成功するかに思えていましたが運営が甘さか本業のアイドル運営しかり、ゲーム事業しかり狙い通りに行っていないようです。

サークル代表の立場としてではなく個人としての感想を語らしていただくと高辻解雇問題の運営の対応は本当に悪対応だったと思います。天下のソニーとは思えないやりかたで他に適切なやり方があったのではないかと思います。第二章へは不安ばかりです。

僅かな期間でしたがナナニジを追いかけて来て正直、楽しかったと思いました。これまで叩く側でしたが叩かれる声優のファンの気持ちも多少は理解できたと思います。

その反面、やはり作品を壊す演技は許せない信条は変わりません。そう言う意味でも閉じた環境下のナナニジは一つの解ではないかと考えます。ナナニジは来年から第二章らしいですが引き続き注視して行きたいと思います。

そう言えば1stアルバムリード曲「ヒヤシンス」のPVにて背景の学校が2021年8月30日で取り壊しになる意味深い描画がありました。これはナナニジの破壊と再生。つまり卒業と新メンバーによる第二章の暗喩ではないかと個人的には思っていますが考え過ぎでしょうか。

何はともあれメンバーの卒業とともにキャラクタも卒業となり、AKB0048みたく2代目佐藤麗華の登場は避けられたことは良かったかと思っています。

それでは次回もよろしくおねがいします。ではまた。

2021年12月30日 TCVV 議長 萱沼真一

TCVV 白書 特別号 2 通巻 25 号

発行 「声優は Visual に出るな!会議」 情報管理部

組版 L^AT_EX2e (Cloud L^AT_EX)

発行日

2021 年 12 月 30 日 (初版)

連絡先

「声優は Visual に出るな!会議」

代表者 萱沼真一

URI <http://www.tcvv.org/>

E-mail info@tcvv.org

Twitter <http://twitter.com/tcvv>

Copyright (C) 2021 The council of ‘Voice actors should not appear in Visual’

